付録　浅間山噴火大和讃

帰命頂礼鎌原の
　月の七日の念仏を
由来を委しく尋ぬれば
　天明三年卯の年の
四月初日となりければ
　日本に名高き浅間山
俄かに鳴動初まりて
　七月二日は鳴り強く
夫れより日増しに鳴りひびき
　砂石をとばす恐ろしさ
ついに八日の巳の刻に
　天地も崩るるばかりにて
噴火と共に押し出し
　吾妻川辺銚子まで
三十二ヶ村押通し
　家数は五百三十余
人間一千三百余
　村村あまたある中で
一のあわれは鎌原よ
　人畜田畑家屋まで
皆泥海の下となり
　牛馬の数を数うれば
一百六十五頭なり
　人間数を数うれば
老若男女諸共に
　四百七十七人が
十万億土へ誘われて
　夫に別れ子に別れ
あやめもわからぬ死出の旅
　残りの人数九十三
悲しみさけぶあわれさよ
　観音堂にと集まりて
七日七夜のその間
　呑まず食わずに泣きあかす
南無や大悲の観世音
　助け給えと一心に
念じ上げたる甲斐ありて
　結ぶ縁もつき果てず
隣村有志の情けにて
　妻なき人の妻となり
主なき人の主となり
　細き煙を営みて
泣く泣く月日は送れども
　夜毎夜毎の泣き声は
魂魄子の土に止まりて
　子供は親を慕いしか
親は子故に迷いしか
　悲鳴の声の恐ろしさ
毎夜毎夜のことなれば
　花のお江戸の御本山
東叡山に哀訴して
　聖の来迎願いける
数多の僧侶を従えて
　程なく聖も着き給い
施が鬼の段を設ければ
　残りの人々集まりて
皆諸共に合掌し
　六字の名号唱うれば
聖は数珠を爪ぐりて
　御経読誦を成し給う
念仏施我鬼の供養にて
　魂魄無明の闇も晴れ
弥陀の浄土へ導かれ
　蓮のうてなに招かれて
心のはちすも開かれて
　泣き声止みしも不思議なり
哀れ忘れぬその為に
　今ぞ七日の念仏は
末世に伝わる供養なり
　慎み深く唱うべし
南無阿弥陀仏
　南無阿弥陀仏

明治初年　　滝沢対吉原作
　　鎌原司郎補正
（萩原 1982 より）